
できれば、もう一度

蒼惟 宙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

できれば、もう一度

【ZZマーク】

Z5065D

【作者名】

蒼惟 宙

【あらすじ】

優士と思依茄は幼馴染で大の仲良し。幼い頃から虐待を受けていた思依茄は必死にそれを隠していたが、優士はそんな思依茄に気づき、守りたいという気持ちと同時に一つ一つの気持ちにも気づいていく・・・。

プロローグ

しなちゃんが好きなもの。グレープフルーツの香り、小さなブルーの花を付ける植物、泣ける話、漫画、季節を感じる匂い etc.. しなちゃんが嫌いなもの。嘘、お世辞、汚い部屋、いじめ、酔っぱい食べ物 etc..

これは僕の頭の中にある、しなちゃんの情報の一部。僕はこの情報を、十年経った今も大切にしている。

しなちゃんは強い。

どんな事があつても、誰にも頼らず、自分を信じて乗り越える。あまり泣いたりしない。そんな光り輝くしなちゃんを、僕はいつも尊敬と同情の眼差しで見つめている。しなちゃんには、とても辛い過去がある。誰にも癒す事の出来ない底無しの傷が…。

しなちゃんは、僕の大切な人だ。

僕としなちゃんは、いつも面と向かって話をする。その日の愚痴なんかを、たくさん打ち明ける。それを、しなちゃんは飽きもせず、毎日毎日ちゃんと聞いてくれる。それが僕にとってどれだけ大切なことなのかは、僕以外の誰にも分からぬ。他の人に分かるわけがない。僕だから分かるのだ。

今僕は、しなちゃんのことを守りたいと思つてゐる。軽い気持ちなんかじゃない。

それが僕の真実だ。

第一話 優士と思依茄

季節は春。たまざまな人が気持ちをリセットして、新たな生活をスタートさせるとても気持ちの良い季節だ。花が咲き乱れ、空気は一定に動いていて心地よい気温を保ちながらも、まだ吸い込む空気や吹き付けてくる風には、冬の欠片が残っている。

私の幼なじみ、古座巳優士と私は草田思依茄の中学校では、一週間ほど前に新入生を迎えた。私達一年生もみんなそれぞれ落ち着き、授業も始まつた。

進級した私達は、去年よりも少し大人っぽくなつたねと、近所の人たちに言われた。でも、私にはどのあたりがどう大人っぽいのかよく分からなかつたが、とりあえず勉強が難しくなつたということは言える。

「思依茄ちゃん、お願ひがあるの！」

ある春の日の放課後、私が部活に行く用意をしていると、同じくクラスの神陸さんに声をかけられた。神陸さんは薄い茶色の天然パーマの髪で、モデルのような抜群のスタイルに、整つた容姿をしているおつとりとした子だ。

「ん？ どうした、神陸さん。」

私が言うと、彼女は何故かパーンと顔を赤くした。私が首を傾げると、

「……君に、こ……渡して……んじを、もらつて……しいの。」

神陸さんは俯いて、もじもじしながらとても小さな声で言った。所々聞こえない箇所があつたので、私は「ごめん、もう一回言つてくれるか？」と言つた。神陸さんは少し迷つていたようだが、やがて決心したように私の眼を見つめると、さつと自分の手に提げていた通学カバンから黄色い封筒を差し出した。

「古座巳君にこの手紙を渡して、返事をもらつてきて欲しいの。」

神陸さんは、今度は普通の大きさの声ではつきりと言つた。私は一

瞬意味が呑み込めなかつたが、封筒を受け取つた瞬間に「ああ…」と納得した。

「優士にこの手紙を渡して、付き合つてくれるかどうか返事を聞けばいいんだな？」

私は確認する為に、誰も周りにいないかを確かめてから、それでもなるべく小さめの声で言つた。神陸さんはコクンと頷くと、安心したのかフウとため息をついて微笑んだ。神陸さんが微笑むと、私はなんとなく癒される。

「やっぱり思依茄ちゃんに頼んで良かった。私、思依茄ちゃんなら絶対に、手紙を見たりしないつて自分に言い聞かしていたんだけど、やっぱり少しだけ不安になっちゃつて…」

さつきも言つたが、さえちゃんはとてもおつとりつしているので、所々切りながら喋る。

「でも、思依茄ちゃん古座巳君の幼なじみだから大丈夫だと思つて頼んだの。私が古座巳君を好きな気持ち、伝えて来てね。」

「……。」

どうしてこう『好き』と簡単に言えてしまうんだろう。まあ、私たつた一人の親友も、そういうヒトだけ…。

「でも神陸さん、どうして自分で渡さないんだ？」

私は神陸さんに言つた。

「もおー、ホントに思依茄ちゃんは天然なんだから……恥ずかしいからに決まつてるじゃない！」

神陸さんはブツブツと言つてから、氣を取り直した様にカバンを持ち直し、スタスタと教室から出でていつた。

私はまだ頭の上に？があつたが、荷物を持って、彼女の後から教室を出た。

柔道の活動場所である道場は、体育館の一階にある。夏は猛暑で倒れる人が続発するし、冬は寒くて、畳に足をつけていられない。柔道部は、この中学校にある部活の中でも最も過酷な部活の一つだと思う。特に部室は強烈。僕としなちやんはもうこの匂いには慣れてしまったけれど、大抵の人は鼻が曲がると言つてひいてしまう。

柔道部は毎年廃部ぎりぎりの人数で、部室は僕たち新一年生一人が占めている。五人ほど新一年生が入ったが、この部室では着替えたがらないので結果的に僕たち一人になる。三年生は、早めに部活を引退してしまった。

僕が、一人部室で着替え終えて部室に五つ並べて置かれているパイプ椅子に腰掛け、今日の授業の復習をしていると、いつもより十分ほど遅れて、しなちやんが来た。

「やつほー！また勉強か？！」

しなちやんが僕の右手側の後ろから肩をポンッと叩いて、元気良く言つた。

「今日は遅かったんだね。」

僕はよつこらしょと言いながら立ち上がると、足元に置いている通学カバンのジッパーを開けて教科書を閉まいながら言つた。すると、ロッカーにカバンやら何やらを詰め込んでいたしなちやんが、勢い良く僕の方を振り返つた。

「な、なに？」

それを見た僕は、思わず眼を丸くしてしまつた。しなちやんは男つてやつは…と言いながら再びロッカーに向き直り、着替え始めた。僕たちは小さい頃から今までずっと、着替えは同じ部屋だ。

「うつそ、マジで？！この歳になつても？！恥かしくないのか？！」

この事を知つた人達は皆こう言つたが、僕たちは今までに一度も恥ずかしいなどと思つたことは無い。

着替え終わると、僕たちは残りの部員五人を呼び集め、練習を始めた。日の光が当たつていた畳は、とても暖かくて気持ちが良いと、僕は思つた。

震えながら帰り道を歩いていた。

僕達は、学校から帰る時必ず商店街を通ることにしてる。最近は物騒なので、なるべく人が多い所を通るようにしているのだ。

煌く夕陽の欠片も完全に地平線の向こうに姿を隠した五時四十分頃、私と優士は家路に着いた。赤レンガの壁にこげ茶色の屋根という感じの同じ二階建ての家が、二組ずつ、六軒ほどズラつと並んでいる所だ。それぞれお隣同士が、会つても無くても良いような短い渡り廊下で繋がっている。

私は小さい時からお隣同士で、我が家から徒歩三分ほどの保育園に入園すると、どちらの親も仕事に復帰した。寂しくなった私は、毎日のように互いの家に遊びにいった。もちろん今でもそうだけれど…

一旦自分の家に帰つてから、着替えが速い方が先に相手の家に勝手に上がり込む。そして相手の部屋に行つて話しをしたりする。

これがどれだけ私にとって大切なことか、私以外の誰にも分からな
い。私には毎日ご飯を食べたり、寝たりすることと同じくらい大切
なんだ。

私は部屋に駆け込みカバンを放り出し猛スピードで着替えてサンダルを引っかけると、鍵をかけて優士の家に飛び込んだ。

ああ……優士の匂い

私はこの柔らかな懐かしい匂いを、いつも肺が満タンになるまで吸い込んで幸せな気持ちになる。私が、世界で一番好きな匂い。

二階にある優士の部屋は散らかっている。でも、足の踏み場が無い

ほど、という訳ではない。棚や机、ベッドの上が少しゴチャゴチャとしているだけだ。それでも、私から見たらやつぱり散らかってる。私は、汚い部屋があんまり好きじゃない。

「いらっしゃい。はい、アイスカフェオレ。」

優士の部屋に入つてワインカラーの敷物が敷かれた床に座つてはいる、涼しい音を鳴らしながら優士が入つてきて、私にバニラアイスの乗つたカフェオレが注がれているグラスを差し出した。私が礼を言つてそれを受け取ると、優士は部屋のドアをガチャッと閉めて、私の向かいに座つた。

「しなちゃん、それ……なに？」

「ん？」

優士はアイスカフェオレを一口飲んでから、私の鞄から飛び出している黄色の物に気がついて言つた。私はあつ、そうかと思い出して「はい」と優士に、神陸さんから預かつた封筒を手渡した。

「ラブレター。」

私はそう言つと、グラスに刺さつていたスプーンでアイスを一口食べた。

「Dear 一年三組 古座巳 優士、From 一年一組 神陸 紗枝さん。読んであげたら?」私は優士にスプーンを向けて言つた。優士はふーんと言いながら封筒から中身を取り出し、広げた。私はそれを見つめていた。

が、その時、突然不安な気持ちが私を襲つた。私はとても驚いた。今までにも、優士は何回かラブレターをもらつたりしてはいたし、私は頼まれて手紙を渡した事も何回かある。それなのに……何故か身体が震え、それから今まで思つたことも無いような言葉が頭を埋め尽くした。

僕が手紙を折りたたんで封筒に入れながらしなちゃんを見ると、僕の方に顔を向けて、じつとしていた。田は、どこか遠くを見ている様だった。

「しなちゃん？」

僕は声をかけてみたが、しなちゃんはピクリとも動かなかつた。今度は、軽くしなちゃんの肩をポンポンと叩いてみた。

「――」

しなちゃんは顔を真つ赤にして、眼を見開いて僕のことを不思議そうに見た。その顔がほんの少し可笑しかつたので、僕はクスッと吹き出してしまつた。

「はい、読んだよ。……『めんつて言つてくれるかな。』

僕はそう言つて、手紙を机の引き出しに入れた。

「……つたぐ、どうしてみんな私に任せんんだ？返事なんて自分で言えぱいいじやないか。」僕が座り直すと、しなちゃんはスプーンでアイスを突つきながら口を尖らして、ぶつぶつとそんな事を言つていた。僕はそんなしなちゃんがとても可愛いと、心から思つた。

「コップ、下げるよ。」

グラスを一つ持つて、僕は部屋を出た所にある台所のカウンターにコップを置くと、すぐに部屋に引き返した。

僕が部屋のドアを開けると、しなちゃんはクローゼットにもたれて座つていた。それだけならまだ良い。しかし、よく見るとしなちゃんは泣いていた。声も出さず、鼻も啜らず、ただ両目から涙を流して……。

僕は驚いてしなちゃんの側に膝をつくと、しなちゃんの名前を何度も呼んだ。

やつとしなちゃんがじつちを向いた。目が充血していて、身体が少し震えていた。しなちゃんはしばらく何が起きたのか分からぬ様子だつたが、肩に置いた僕の手を払いのけて、ベッドの方にズリズリと後ずさりした。

「しなちゃん

「

「「」「」めぐ。なんでもないの。ビクしたんだねう私…」

しなちやんは恥ずかしそうに俯いてから、もう一度僕の眼を見てなんでも無いよと笑った。いつものしなちやんじゃない。いつもの男の子っぽい喋り方じゃない。

「しなちやん、泣いてるよ?」

僕はますます不安になつてしなちやんに近寄り、しなちやんの頬に涙でへばり付いている髪を取ろうと思いつつ、手を伸ばした。ビクッと、しなちやんの体が揺れた。眼に光が射していなくて、何だか真つ黒に見えた。

「あっ、ああーもうこんな時間ーー家に帰らなーと…」

そう言いつとわいつと立ち上がり、しなちやんは「馳走様! また明日ねと、僕の部屋を走り去つた。

玄関のドアがガチャーンと閉まつた。僕はビクシヨウもなくて、ただそこに手を床にさまよわせながら座つていた。

しなちやん、どうしたの? 僕、しなちやんが泣いたといひ初めて見つたよ。何かあったの? もし良かつたら僕に話して……

僕の心の中に、今いろになつてこんな言葉が出てきた。僕は、自分が嫌になつた。

第一話 しなちゃんの家庭事情

優士の部屋で起こったちょっとしたごたごたから、すでに4週間以上が経過していた。春はもうすぐ終わり、梅雨の時期に入ろうとしていた。

そして私達は今、学期末テストの為に（私だけ猛）勉強していた。

「もおぜえつつつつたたい無理！！」

私はそう叫んでから、きちんと整えられたアイボリー色のシーツを被せられたベッドにボフッと頭を乗せた。

一時頃、学校が終わって家に帰ると、私は勉強しなければいけないというプレッシャーにだるさを感じながら、だらだらと服を着替え、勉強道具を持つと優士の家に侵入した。そして、あまりにも散らかった優士の部屋を、一人で大掃除をしたところだ。

私は目の前にあるオレンジジュースの入ったグラスを持って、右横にある窓から射し込んでくる日の光を当てた。そんな私を見て、優士は仕方なさそうにフーとため息をついた。でも、怒っているのではないと思う。だって顔が笑っているもの…。

「あのねえしなちゃん。早過ぎるよ、音を上げるのが…。しなちゃんが勉強嫌いなのは知ってるけど…。好きな教科とか、無いの？」

私は思いつきり優士を睨んでやつた。

「優士は何でも得意だからね、そんな事が言えるんだ。好きな教科なんか無い！」

私がほっぺを膨らますと、優士は声を上げて笑つた。私はふんつとノートに向き直り、教科書の単語を書き写し始めた。すると、突然

優士がそつと言つた。

「僕にもね、嫌いなものがあるよ。」

優士が、じつと私の顔を見る。

「え、そうなのか？何だ、それ？」

私も、優士の奇麗な顔を見返す。

「女の子。」

優士の口元が、ふつと優しくなった。

「?????はい?じゃあ好きなのは?昆虫とか?」

私はそんな優士のちよつとした表情になんだかドキドキしてしまつ。最近、私はどうかしてゐる…

「しなちやんだよ。」

優士は何の躊躇いも無く、私の眼を真つ直ぐ見て言つた。昔からそうなんだ、優士は。

「……。」

私は恥かしいの域を通り越して、呆れてしまつ。優士は『好き』とか『僕の大切な親友』だと、そういう事スラつと言つてしまつ。どうしてそんな風に、軽々と言つちやうんだろ?私は、そういう言葉は大切にしまつておきたい方なのだ。だつて、声に出したら無くなつてしまいそうで…嫌だから…

「はいはいそうですかつ。ありがと!」

私はシャーペンを握り直すと再び勉強との戦いを再開した。優士はクスクスと笑つていたが、やがて静かになつた。たぶん勉強を再開したのだろう。

それからしばらくして、私は何となくあたりが暗くなつたのを感じ、ふつと顔を上げた。壁に掛けてある振り子時計は、長身と短針が『6』を指していた。鉛の様に重くなつてきていた瞼が、一瞬で風船のように軽くなつた。

「うわあつ!どうしよう!」

私が悲鳴を上げると、驚いてノートから顔を上げた優士が私の顔を眺めた。私はものすごい速さで勉強道具を片付けた。そして勉強道具を入れた手提げカバンを肩に下げて立ち上がり、啞然と私を見ている優士に「また明日ね」とだけ言つて、いつかの時のように慌てて部屋から出ていった。

その瞬間、私はあの日のことを思い出した。私が優士の部屋で泣いてしまつて、慌てて帰つたあの日……私は母さんに殴られた。タゴ

はんを作るのが遅いからつて。
もつ……痛いのには慣れてるけどね。

テストまであと二日となつた。しなちゃんの体力があとどのくらいもつのか、僕はとても不安だ。なぜなら、しなちゃんの顔色が最近青ざめているからだ。

今日は久しぶりにしなちゃんの家に行きたいなあと、下校途中に僕が言つと、それまで元気に話をしていたしなちゃんが急に怯えた顔になつて、黙り込んでしまつた。僕はそれがどうしてなのか聞こうかと思ったが、震えているしなちゃんを見て、止めにした。

「あ……しなちゃんが嫌だったら僕の家でもいいけどね。」

僕がそう言つと、しなちゃんはまだ少し震えていたが、すまなそうな顔をして僕の方を向いた。

「ありがとう。ごめんな。私の家、今模様替えしてるから……それで、散らかってるんだ。」しなちゃんは長くため息をつくと、晴れ渡つた空を仰いでまた黙り込んでしまつた。

今のは、嘘だ

僕は即座にそう思った。

しなちゃんは滅多に嘘をつかない。それでも嘘をつく時は、ずっと自分の腕を握り締めているので、腕に爪の型が残る。しなちゃんは嘘が嫌いだから、たぶん嘘をつく時、自分で自分を罰しているんだろ?。僕はそんなしなちゃんに、小さい頃からある疑問を抱いていた。それは、しなちゃんが僕の家で遊んでいて、六時半になると逃げるようになつて帰る。そして次の日、口の端が切れていたり手の甲に切り傷が出来ていたりする。その度にしなちゃんは「転んじゃつたんだ」とか、「今乾燥してるだろ?だから唇が割れちゃつたんだよね」とか、そんな理由を僕に言つていた。大丈夫だよって……

その言葉の数だけ、しなちやんの腕は傷だらけになつていった。

僕は中学に入学するくらいまでその『嘘』を信じていていたけれど、さすがに最近はそうもいかない。しなちやんの傷は増える一方だ。元気な振りをしているけど……

「しなちやん……」

本当に大丈夫なの？ 僕に一体何を隠しているの？

「ん？ 何だ？」

しなちやんは、赤茶色の瞳のパッチリした眼を僕の顔に一直線に向けて明るい、いつもの声で応じてくれた。

「今日のおやつ、チヨコミントアイスだよ。」

「うおっ、マジか！ ……やつたーーー！」

ああ神様、どうかこれ以上しなちやんに何も起きませよ！ 僕の嫌な予感が外れますよ……

やつとテストが終わつた！ 私は喜びのあまり、自分の部屋で鼻歌を歌つていた。

さつき優士の家で、テストの点数を公表した。優士先生のおかげで、私の成績は良かつた。全て80点以上！！！

しかし、そう長く喜びに浸かつてすることはできない。私は今から悪魔の為に夕飯を作らなければならないのだ。奴が帰つてくるのは七時。今は六時二十五分なので、まだこの前よりは余裕がある。まあ殴られずに済むだろう。

この前はまだご飯が炊けていないというだけで、傘で腰を叩かれた。軽くじや無い。バットを思いつきり振るように叩いた。私はそれを手でガードしたので、幸い甲に裂傷が出来ただけで済んだ。これら、優士になんとか言い訳がたつ。

母さんは、私を貶したり殴つたりするのが好きらしい。ストレス発

散にでもなるのだろうか？もう慣れたからいいけど、最近人に触られるといつ手を払ってしまう。だから、同じクラスの子達はあまり私に近づかないようになった。

ガツ…チャ

あ、帰ってきた！今日はあつという間にご飯が出来ちゃつた。やっぱ優士の作ってくれたヨーグルトシェイクのパワーかな？

「お帰りなさい、お母さん。」

私はエプロン姿のまま、居間で母さんを迎えた。でも、今日は母さん一人じゃなかつた。

「ただいま。思依茄、今日はお客様がいるのよ。」

その言葉に、私は母さんの隣に立つて、170cmくらいのハンサムな男性に顔を向けた。筋肉質でスリムな見た目とは反対に、短い髪はとても柔らかそうで、瞳は茶色をしていた。

「この人は私のお友達なの。」

母さんはその人と顔を見合させて、ニコッと微笑んだ。たぶん、この人はお母さんの姿に目がいったんだろう。お母さんは美人だからなあ…。性格は殺人者だけ。

「こんばんは。」

私がペコリと頭を下げるが、その人は私の前に進み出て大きな手を差し出した。その人は私に、とても優しい笑みを浮かべてくれた。

「私は御前おんまえとあります。よろしくね」

そう名乗った彼は、私と握手をした。

それから私はテーブルに、母さんの分と彼の分のご飯を出し、いつも私が座っている椅子に御前さんを座らせた。

「君は食べないのかい？」

御前さんは席に座ると、私にそう言つてくれた。私はその心配そうな顔と声に、何か懐かしさのようなものを感じて嬉しくなりながらも、

「あ、大丈夫です。私、実は先に食べてしまつたんです。だから、どうぞ食べてください。」と言つた。御前さんは疑いもせずに笑つ

た。

「そう、……ありがとう」

私は、チラッと母さんの顔を見た。母さんは私に曰で「早く引き下がりなさい。」と言っていたので、私は御前さんにもう一度挨拶をしてから、鳴りそうになるお腹を押えて早歩きで自分の部屋に戻った。そしてベッドに倒れ込んだ。

ベランダ越しに繋がっている優士の部屋から、格闘ゲームの様な電子音が聞こえていた。私はその時、優士のことをものすごく恨めしく感じた。

しなちやんが僕の家に来なくなつた。

それが始まつたのは、夏休みになる少し前からだ。学校も休んでいられるから、もうかれこれ一週間と二日会つていない。

四日目になる今日の朝、僕が駅に向かう旭を見送つていると、向かいのドアからしなちやんのお母さんが出てきた。僕は桃花さんを二年ぶりに見たけれど、相変わらず奇麗な人だと思った。桃花さんは僕に気がつくと、スタスターと歩み寄つてきて「おはよう」と言つた。
「久しぶりね、優士君。一年ぶり……かしら？」いつも思依茄と仲良くしてくれて、どうもありがとう。あら、古座巳さんは、もう行つてしまつたのね。」「

そう言つて腰まであるワイトブラウンのストレートヘアを風になびかせながら微笑んだ。

「あ、はい。それより桃花さん、しなちやん、大丈夫ですか？最近見かけないんですけど。」僕がずっと思つていた事を聞くと、おばさんの体が、ほんの少しだがビクつと揺れた。僕はそれを見逃さなかつた。おかしい……。

「思依茄ね、風邪ひいちゃつたみたいなの。あ、家に鍵を掛けてお

くの跡がちやつた。鍵はつと…

おばさんは、最後の方を独り言の様に呴きながら自分の家に鍵を掛けた。

「それじゃ、またね優士君。」そつとおばさんは駅に向かって、そつそつと歩いていった。

僕の背中に冷や汗が流れた。頭の中に嫌な映像が浮かんだ……

まさか！

僕は火の元と水道を確認してすべての窓の鍵を閉めると、一階にある自分の部屋に駆け上がって、小学生の頃にしなちゃんがプレゼントだと言つてくれた、しなちゃんの家のスペアキーを必死で探した。クソッ…どこだ！

やつと引き出しの奥に見つけると、転がるように階段を駆け降りて自分の家の玄関の鍵を閉めてから、そつとおばさんが閉めたドアに飛びついて鍵を開けた。

「……？」

真つ暗だ。何の音も無い。空中に漂う微小の埃までもが、止まっているようだ。家中のカーテンが閉まっている。僕は念の為に内側から鍵を閉めた。一階を探す必要はないような気がして、僕は手探りで階段まで辿り着き、できるだけ音をたてずに登つた。二階に到着してもまだ暗かつたが、目が慣れてきたのかだんだん周りが見えるようになつてきた。

先に進もうとしたその時、何かが足に当たつた。僕は心臓か止まりそうになるほど驚いたが、何とか声を抑えた。よく見ると、ものすごい量のゴミがぎつしり詰つた袋らしき物体が、廊下を埋め尽くしていた。僕はその隙間をつま先立ちで進んだ。

とうとうしなちゃんの部屋に着いた。

（…………え。）

僕の脳は、目の前の光景を受け入れることを拒否した。しなちゃんの部屋のドアの前に、箪笥やソファなどの家具が幾つか積んであつ

たのだ。僕は順番に邪魔物を退かすと、恐る恐る部屋のドアを開けた。

何にも無い

しなちやんの部屋か……懐かしいなあ。僕が感傷に浸つてこると、ぐしゃぐしゃになつたシーツやクッションが山積みになつたベッドの上で、何かが動く気配を感じた。

驚いたが、意を決してベッドに近づき、バツと山を崩すと、そこには真つ青になつて、だいぶ痩せてしまつてこるしなちやんが、私服のまま横たわっていた。顔、体中に傷や痣がある。僕の頭の中が、真っ白になつた。

「しなちやん！思依茄？！」

僕は急いでしなちやんを抱き起こし、ベッドから降ろした。そしてしなちやんの体を支えながら、一緒に床に座つた。

しなちやんはしばりくすると、薄く皿を開けて、ゆっくりと首を横に向けて僕を見た。

「しなちやん？！田が覚めたんだね、良かつたあ……。しなちやん、今から僕の家に行こ。」

僕の目に、涙が溜まつた。しなちやんを背中に乗せると、すぐに僕の家に帰つた。

僕はしなちやんを自分の部屋に運び入れると、彼女に座れるかどうか聞いた。しなちやんが頷いたので、すぐにベッドに座らせて部屋を出て行き、コップにお茶を並々と注いで戻つた。しなちやんはそれを受け取つてゴクゴクと飲んだ。

「しなちやん、何か食べたい物ある？」

僕はしなちやんの隣に座つて言った。しなちやんはどうか考えているようだつたが、しばらくして「何でも良いよ」と言った。ぼくはおかゆを作つてあげた。しなちやんはすぐに全部食べてしまつた。

「しなちやん、聞いてもいい？」

「…。」

しなちやんはガクンと、頭を力無く落として頷いた。

「何日、飯食べてなかつたの？」

「……三日くらいい」

「……つ？！」

僕は絶句してしまつた。

「母さんにね、彼氏が出来たの。何回か遊びに来たのよ。」

しなちやんはフフフと笑つてそう言つた。僕はどう答えていいのか、頭の中をグルグルと搔き混ぜてみた。僕がしなちやんの顔を見ると、しなちやんも僕を見て、まだ微笑んでいた。

その笑顔は、僕の心を抉つた。僕は、しなちやんに對して、可哀想以上に何か空しいものを感じてしまった。僕は、どうすればいいんだろう？どうすれば

「すごく優しい人なの。その人が十日前に一人で家に来て言つたの。僕は、君のお母さんよりも君のことが好きなんだつて……。どうして急にそんな事言い出したんだろうね、あの人。私、口が動かなかつた。だって、何時の間にか後ろにお母さんがいたんだもの。その人は、母さんに追い出されて帰つていつた。母さん、すごく恐い顔で私のことを見て……あんたなんか、私が殺してやるつ！何回あんたが消えてくれたら良いつて思つた事か。あんたを今まで殺さなかつたのは、これから私の人生が台無しになつた困るからよ。でも、隠せば良いわ。そうよ、どうして隠すつて事を考えなかつたのかしら。そうすれば、私には何の影響も無いわ！あんたはもういらない。だから、死になさい！……そう言いながら私をいろんな物で何度も殴つてたわ。他にも何か言つてたけど、氣を失いそうになつてたから分からなかつた。それで、まあ何とか今日まで生き延びて、優士に助けられた……。優士は、命の恩人だよ。ありがとう。」

しなちやんはそれだけのことを、息もつかずに一気に喋つた。目に涙はない。僕はしなちやんに何も答えてあげられなかつた。どうしてこんな事になつちやつたんだ？僕は何を見てたんだ？

「僕つて馬鹿だよ。僕はしなちやんのこと何にも知らなかつた。今

だつて何も……」

何時の間にか、心の叫びは口から流れ出していた。しなちゃんは僕の顔を、まだ光の消えていない日で見据えて言った。

「私、優士の側にいて、生きてて良かったと思つてゐよ……」
開け放した窓から吹き込む風が、しなちゃんの長い長い漆黒の髪を撫でていった。

第二話 夏の午前に吹く風を

私は特にすることも無く、夏の午前の風が優しく揺らす薄いカーテンを視界に入れながら、ボーッと外を見ていた。窓の外に、カーテンのかかっていない薄暗い部屋が見えた。殺風景な、私の部屋が。

「しなちゃん、どうしたの？ボーッとしちゃって。」

優士がアイスコーヒーの入ったグラスをテーブルに置き、私の隣に腰掛けた。私は首を振る。

「私の部屋を見てただけ。あそこに、一昨日まで倒れてて、死にかけてたなんて、信じられなくて。」

私は喋ることにも、たくさん体力を使つた。今は何をしても、疲れれる。

優士に助けられて、私は今、彼の部屋で夏休みを過ごしている。今年の夏は去年の何倍も熱くて、私は、湯でたこのよつになつてのびていた。

「しなちゃん、本当に何もしなくて良いの？」

優士が、もう百回くらい言つたであろう台詞を、また言つた。私は、これもまた百回言つたと思われる返事をした。

「何もしなくて良いの。」

優士のきりつとした眉の下にある目で見られると、私はいつも苦しくなつてしまつ。私は、あの日助けられた瞬間に分かつてしまつた。優士は、きっと、ずっと前から、母さんのこと、私が虐待されていることを、知つてしまつていたんだ。その目は、本当のことを見抜いていたんだ。やっぱり、優士に嘘はつけないな…

「僕、おじさんが蒸発しちやつてから、様子がおかしいことに気づいてたんだ。言い訳になっちゃうけど、ほんとなんだ。でも、認めたくなかった。あの優しかった桃花さんが、あんな事するなんて、認めたくなくて、逃げてたんだよ。現実から逃げて、一番傷ついてるしなちゃんを、見捨てたんだ。」

優士の声は、震えていた。優士は心が優しいから、いつも自分ばかりを責めて、苦しむ。

「優士は悪くない。」

私は、思ったことをそのまま口にした。優士が目を丸くする。

「母さんはね、人前では良い人を演じていたんだよ。気づかなくても、しようがないよ。母さんは、嘘をつくことをなんとも思ってない人だからね。」

私は何だか悲しくなった。

「私のことを可愛がってくれたのは、もう赤ちゃんの時で終わり。今でも覚えてるよ。初めて叩かれたのは、保育園に入園する前くらいだったかな。母さんが私を保育園に入れたのも、小学校と中学校に行かせてくれたのも、たぶん私が邪魔だったから。母さんは、外でいろんな事をしたかったんだと思う。でも、ストレスを発散させるのに、私は必要で、私は、そのためだけにある、ただの道具なんだ。」

優士が眉をひそめて私を見ている。きっと、退いてるんだろうな、こんなこと言う私に。

「私は、存在してもしなくてもどっちでもいいんだなって、よく思うんだ。死んだって、誰も悲しんでくれる人なんかいないんだよ。きっとみんな可哀想だ、残念だって言つけど、心からそんな風に思つてくれる人なんて、どこにもいな…」

フワッと優士の匂いがした。優士の両腕が、私の体に回されていた。私の思考は、優士が突然とつた行動よりも、優士のあの懐かしい、私が世界で一番好きな匂いの方を選んだ。ずっと、この今までいたら良いと、私の体の全細胞が叫んでいた。

僕は、胸がキリキリと痛くなつた。どうしてそんな事言つんだよ…

……しなちやんは、自分の事をずっとそんな風に思つていたのか
？！

「私は、存在してもしなくてもどうでもいいんだなって、よく思うんだ。死んだって、誰も悲しんでくれる人なんかいないんだよ。きっとみんな可哀想だ、残念だつて言つねば、心からそんな風に思つてくれる人なんて、どこにもいな…」

僕は、しなちやんを抱きしめた。その先を聞きたくないのと、言わせたくないという思いで。しなちやんの体は薄くて、小さくて、手加減しないとペシヨンて潰れてしまふんじゃないかと思つせじ、軽かつた。

しなちやんの心は、もう誰にも修復できないほど、粉々に砕け散つてしまつたんだ。十年近くの年月をかけて、しなちやんの心は、崩壊していくに違いない。

僕はゆっくりとしなちやんを放した。しなちやんの瞳、涙はなかつた。乾いた大きな黒い目が、僕を見ていた。どこまでも続く真つ暗なトンネルみたいで、どこにも、何も映つていない。

「前にも言つたけど、」

しなちやんを見た。少し乾燥した唇が、ゆっくりと動いた。

「私、優士の側について、生きてて良かったって思うよ。」

と、その時、階段を誰かが上がつてくる音がした。しなちやんは、いつものようにベッドに隠れた。僕は、その上から布団をかけて、クッショングをたくさんのせた。

「ちょっと良いか？」

旭だ。^{あきひ}僕はいいよとつて、雑誌を読んでいたように見せかけた。旭はドアを開けると、僕の前に座つた。仕事は早退きしたのだろうか…。

「今、そこで草田さんに会つたんだ。思依茄ちゃんが家出したらし
い。」

僕はドキついた。

「え、ホントに？」

どうか、しなちやんがいることに気がつきませんよ！」

「ああ。優士、知らないか？」

しなちやんが男っぽい口調になつたのは、きっと旭のせいだらう。旭と呼んではいるけれど、一応僕のお母さんだ。僕は、小さい頃から彼女のことToOne度も「お母さん」と呼んだことが無い。旭は、お母さんというより男勝りなお姉ちゃんという感じで、一年前に父さんが死んでからも、僕たちは姉弟みたいな感じで気軽にやつてきた。

「僕は、何も聞いてないけど…。」

不審に思われない様に気をつけながら、僕は雑誌を閉じ、座り直した。旭が、そうかと言つて辺りを見回した。僕は、彼女の目を追いかけた。

「そういえば久しぶりだな。」ひやつて座つて優士と話をするのは。

旭がにこっと笑つた。僕は彼女を見ると、どうして宝塚に入らなかつたんだろうと思う。絶対男性役に匹敵タリなのに。

「優士、少し話があるんだが、聞いてくれるか？」

旭が、真剣な顔で言つた。僕は少し考えたが、覚悟を決め、頷いた。

「思依茄ちゃんのことなんだ。」

やつぱり…。

私は息を殺して、優士と旭さんの会話を聞いていた。

私達は、お互いのお母さんことを下の名前にさんを付けて呼んでいる。一人がそうして欲しいと言つたからだけじ、一人ともおばさんと呼ぶには相応しくないので、違和感はなかつた。

「しなちやんが、どうかしたの？」

残念ながら姿が見えないので、私は声だけを聞いた。

「これはずつと前から思つていたことなんだが、思依茄ちゃん、虚

待を受けてるんじゃないのか？」

低い、少しハスキーな声をしている旭さんが、静かに言った。

「え、どうして？」

優士は、動搖したらしい。声だけで分かる。唐突にそんなこと言われたら、誰だつて動搖するだろう。

「この間帰つてくる時に、ポストの所に立つてゐる思依茄ちゃんを見たんだ。あつちは氣づかなかつたみたいだけど、その時けつこーたくさん腕とか顔に傷があるのが見えたんでね、そう思つたんだ。」

私は思い出した。部屋に閉じ込められる前日の夕方だ。私はあの時以外、旭さんが帰宅するであろう時間帯に、外に出ていない。少し間があいたが、やがて優士の声が聞こえてきた。

「学校の部活で、怪我したんじゃないかな。」

ほとんど何でも器用にこなす優士だけど、嘘をつくのはものすごく下手。これも、昔からだ。

「思依茄ちゃんは、部活に入つてないはずだけだな。」

旭さんが、優しく言った。優士は、旭さんの「」優しい所を、ほとんど全て受け継いでいると思つ。

「…どうして、怪我を見ただけで虐待されてるんだつて分かるの？」優士が参りましたという感じで言った。旭さんの次の言葉に、私は思わず声を上げそうになつた。

「私が、そつだつたからな。」

「え？！」

優士が動いたような音がした。

「小さい時、お父さんもお母さんも死んじやつたから、遠い親戚のうちに引き取られたんだ。でも、私は邪魔者扱い。そのおじさんもおばさんも、若かつたこともあるけど、あまり子供に関心が無かつたんだ。私はストレス発散の対象になつた。私が中学を卒業して高校に入学する時、お互に浮気をしていることが分かつてね、二人は離婚したんだ。まあ、運良く寮制の高校だつたから、住む所には困らなかつたけど。一年生の終り頃、その高校の理事長が私の事

を知つて、女性の理事長だつたんだけど、養子にしてくれた。そういう事をとても大切に考える人だつたからね。もし母さんが私を養子にしてくれなかつたら、私はあの人と出会つことはなかつたよ。」

私は、その話を聞いてとても驚いた。

でも、おじさんのことは今でも覚えてる。ハーフだつた優士のお父さんはとってもカッコよくて、私は大好きだつた。旭さんが十七歳の時に結婚して、その翌年に優士が生れたんだと、小学生の時に優士が話してくれたことがあつた。

私は、また外の音に注意深く耳を傾けた。

僕は、始めて母さんのことをちゃんと知つたような気がした。少し、嬉しく思つた。もう、しなちゃんが今ここにいる事を、告白してしまいたいと思つた。旭なら、分かつてくれる。

「旭、僕はどうしたらいいんだろう。」

でもとりあえず今は、言わない事にしておこひ。旭の目が、僕の方を見つめている。その目が、僕を通して後ろにあるベッドを……その中のしなちゃんを見つめている様な気がして、僕は緊張した。

「それは、自分の気持ちじゃないかな。私はどうしてもあげられないけど、優士が思依茄ちゃんを大切に思うなら、守つてあげなよ。優士がいる事で、思依茄ちゃんは生きてるのかもよ。」

僕はその言葉を聞いて直感した。この人は、ここにしなちゃんがいることを知つている。

「私も、その時親友だつた男の子のおかげで、今こうして幸せに生きてるしね。」

パチッと片眼を瞑ると、旭は立ち上がりて部屋を出ようとした。

「それともう一つ。」

僕も立ち上がり、旭の背中を見た。

「優士」とつて思依茄ちゃんは何なのか、早めに気づいてあげない。

旭は、初めて母親らしい口調でそう言った。階段を降りていく音が小さくなり、その後玄関のドアが開く音がした。また、仕事に行つたのだろうか。

「ブハーッ！」

僕がOKの合図を出すと、しなちゃんが汗びっしょりになつて、布団の中から飛び出してきた。僕は扇風機のコンセントを繋ぎ、しなちゃんの前に置いて固定してあげた。しなちゃんが気持ちよさそうに目を閉じる。広いおでこが、風にさらされた。

「あ、～！～気持ちいい～」

本当に気持ちよさそうに、しなちゃんはずつと風にあたつていた。

僕は、そんなしなちゃんが、僕にとつて何なのかを考えた。何なんだろう…

「優士、私、一回家に帰つてみる。」

しなちゃんが突然言った。僕は一瞬思考回路がストップした。

「だ、大丈夫なの？」

僕を見たしなちゃんの顔は、なぜか爽やかだった。

「いつまでもここにいるわけにもいかないし、母さんが搜してくるらね。」

しなちゃんは立ち上がりつて、扉に向かつた。

「私が危ない時はさ、助けに来てくれたなら嬉しいな。」

振返つて、しなちゃんが微笑んだ。僕は、しなちゃんが戦いに挑むのを、止める事はできないと思い、

「分かった。」

そう言った。しなちゃんは、壁の向こうに消えた。

第四話 蚊取り線香

母さんは、リビングにあるテーブルの椅子に座っていた。私は、ゆっくりと彼女に近づいていった。

「ただいま、母さん。」

母さんの肩がビクッと動き、ゆっくりとこちらを向いた。目には、涙が溜まっている。よく見ると、テーブルの上には分厚い本が乗っていた。

「どうやって出たの？」

母さんは田の前に立った私に、何の感情も込もっていない声で言った。私は、もう戦うと決心した。怖がつたりしない。

「窓から抜け出したんだよ。」

私も、感情を込めずに言った。母さんは、無表情のままだった。田の下に、隈ができる。

「母さん、私はもう堪えられない。」

そんな母さんの田を、じっと見てみた。母さんは、何も言わない。私は続ける。

「私は、母さんのこと尊敬してた。キレイで、頭が良くて、何でもこなしてしまっから。」

「尊敬？私はあなたにそんな風に思われるようなことは何一つしてないわ。」

髪をかきあげて、母さんが言った。まだ目が潤んでいる。私の涙は、もう一滴も残っていない。

「父さんがいなくなつてから、母さんは私を使ってストレスを発散させてた。私は、母さんが辛いんだと思ったから、ずっと我慢してきた。」

私は、真っ直ぐの姿勢を保つた。

「でも、私は母さんにとってただのストレス発散の為の道具でしかない。私は、私と母さんを傷つけてきた父さんが嫌いだった。私達

を物の様に扱う父さんが、憎かつた。」

父さんが出て行つたのは、十年以上も前。私は、少し悲しかつたけど、泣かなかつた。涙なんて、出なかつた。けれど、母さんは、大粒の涙を零して泣いていた。

「でも、今は母さんが憎い。私が要らないなら、こんな風に言葉を喋つたり、いろんな感情をもつて考えたり、思い出ができない様にしてくれば良かつたのに……。もっと早く殺してくれればよかつたのに！」

私は最後の方を、叫ぶよつにして言つた。母さんの田が、見開かれている。涙が、頬を伝つた。しかし、私は構わず言葉を続けた。

「でも、母さんには感謝もしてる。」

母さんは、両手で口を覆つた。

「母さんがいてくれたから、育ててくれたから今の私はここにいる。それに、優士にも会えた。私は母さんを憎んでいるし、母さんに感謝してる。おかしいけど、これが私の気持ちだよ。」

私は、彼女に近づいた。視界に、あの分厚い本の表紙が入つてきた。それを見た時、私の呼吸と心臓が、一瞬止つた。私の心に、穴が空いてしまつた。

「あ、母さんね、今アルバムを見てたのよ。」

母さんがゆつくりと言つた。

母さんが、私の写真を？アルバムを見てた…？！私は、いろいろな感情や思いが、全て奈落の底へ落ちて行くよつた感覚を覚えた。何にも無くなる。

「思依茄が小さい時の写真。私、この写真を見て、いつからこんな人間になつちやつたんだろう…つて、思つた。」

一度アルバムの表紙を見やつてから、母さんは私の顔を見た。そして、私の手を握つた。

「私は、思依茄がこんな良い子に育つてくれて、嬉しい。もう、いつのまにか大きくなつてしまつた。私は、あなたのことを、一度も見ようとしていなかつたのね。」

私は、激しく動搖した。母さん、そんなこと言わないで。私は母さんを憎んでいるのに…。

「あなたのこと愛してるわ。」

私の目が、顔が熱くなる。頬から顎に、何かが流れていく感触がした。

ああ…私にもまだ涙があつたんだ。もう、使い果たしたはずなのに、まだ流れてくる。

「母さん、もう…遅いの。今その言葉だけで、私の傷は消えない。元には戻らない。私はもう…ここには戻ってこない。」

私は母さんの手を払つた。

「さよなら。」

方向転換をして玄関に向かつた。その時、背後で椅子の動く音がした。

「どうして…？」

母さんの、非難するような涙声が聞こえた。私は、歩みを止めた。
「どうしてみんな私から離れていくのよ！孝介さんも、御前さんも……思依茄も。」私の体が、素早く反応した。この感覚は……
「どうしてよお……！」

ゴシ…！…

振り向いたその瞬間に、私は頭が割れたかと思つくらいの痛みに襲われた。片目を開けると、母さんの手には、アルバムがあつた。母さんが、もう一度それを振り上げる。

「私が何をしたって言うのよ…どうして上手くいかないの…。」
何度も何度も私は殴りつけられる。台所に入つた母さんは、フライパンを持ってきて、床につづくまつた私の体を叩きはじめた。私は、あまりの痛みに声が出せなくなつていた。

* * * * *

しなちやんの家の前に立つて待つていると、中から誰かが叫ぶ声と、物が床に叩き付けられるような音がした。それがしばらく続き、そして、しーんとなつた。僕はそろそろヤバイと思い、玄関のドアノブに近づこうとするが、中から桃花さんが飛び出してきた。泣いている。僕には気がつかなかつたようだ。

僕は中に入ると、奥に進んだ。と、リビングの入り口に、しなちやんが倒れていた。周りには、血が飛んでいる。僕は、凍りついた。

「思依茄！しつかりしろ！」

僕は近づいて、しゃがみ込んだ。頭を殴られたのか、額に血が流れている。しなちやんは、眠つている時のような安らかな顔をしていた。僕はできるだけ冷静になつて、こいつは揺らしたりしない方が良いのだと考えた。

「しなちやん。」

僕は泣き声になつたが、頭の中に、電話をするといつ考えが出てきた。

「ゆつ…し。」

しなちやんの目が、細く開いた。僕は驚いて、しなちやんの顔を見た。

「あ、しなちやんっ！今、救急車呼ぶから。」

僕は、自分の斜め後ろにある電話の受話器を取つた。

119番と旭の携帯に電話をしてから受話器を置き、僕はしなちやんの横に座つた。ポケットに入つっていたハンカチを、しなちやんの傷口に当てた。

「母さんがね…私のこと愛してゐつて…言つたの。」

しなちやんが途切れ途切れに喋りはじめた。僕は、何も言わずに頷く。

「勝手だよね…父さんも母さんも。もう、何もかも終わつたけど。」

しなちやんはそれ以降、何も喋らなくなつてしまつた。僕は、しなちやんの涙で濡れている頬を、手の甲でそつと撫でた。その瞬間に

分かった。

今僕は、しなちゃんのことを守りたいと思つてゐる。軽い気持ちなんかじゃない。それが、僕の真実だ。

どこからか、蚊取り線香の匂いが漂つてきた。

清潔な感じのする白は、私の好きな色だ。今、白いベッドに寝ている。病院は、白を貴重にしているから、とても落ち着く。しなちゃん……

誰かが呼びかける声に気がついた。けれど、私はその声が誰なのか、すぐに思い出すことができなかつた。でも、ここが病院だということは、何故だか分かる。

「思依茄。」

私は目を開けた。そこには、あの優しい性格とは反対の、何もかもを見抜いてしまつのような目があつた。整つた顔が、私を、じつと見ている。

「優士。」

声が違つたように思つたけど、確かに優士だ。目が充血している。「良かった。上半身だけなら起き上がっても大丈夫だつて、病院の先生が言つてたよ。」優士はそう言つて、力無くにっこりと微笑んだ。私の好きな、優士の匂いがする。私は起き上がって、フー……と、長く息を吐いた。

「私、一応生きてるんだね。」

私は、何となくそう言つた。

「どうして、そんな言い方するの？」

優士が、悲しそうな顔をして、穏やかに言つた。私は、優士の優しさと暖かさに包まれて、とても安心して、胸が一杯になる。

「夢を見たんだ。」

私は、優士の質問には答えずに、今でも明確に覚えているその夢を話すことにした。

「母さんが、どこか暗い所にいて、それを見ている私を、私が見てるの。私は、そこで迷子みたいに不安げな顔で迷う母さんを助けてあげたいんだけど、なかなか助けられなくて、近づこうと思つて

「どんどんその暗闇に向かって行くんだ。でも、その時後ろから私を呼ぶ声がして、振り返ると」

私は彼を見た

「優士がそこにいた。私は、優士の姿を見るまで、このまま暗闇の中に進んだ方が楽になるんじゃないかって思つてたから、きっと優士は死に向かう私を助けに来てくれたんだね。私は、優士の手を握つてから母さんの手も握つて、どんどん明るい方に進んでいくつてそこで田が覚めた。」

私を見る優士の顔は、何もかもを許してくれそうな、そんな表情をしている。

あの夢は、私に生きると語ってくれたんだろうな……

僕は、何でもなさそうに淡淡と夢の話をするしなちゃんが、とても
切なく思えた。

僕の心の叫びが通じたんだろうか…？僕は、しなちゃんが気を失っている間中、ずっととずっとしなちゃんの名前を心の中で呼んでいた。「夢を入れたら二回だね、優士が私の命を救ってくれたの。」

つぼのしなぢやんの笑みは、僕を悲しくさせた。

「助けるつて、約束したからね。」

「思依茄、聞いて欲しいんだけど。」

僕が語り、しなちきんはどうしたの改まりちきりと語り笑

「しなちゃんはハツモ一人で戦つてゐナビ、もつ

しいんだ。

ほんの少し間があいてから、しなちやんは「どうでも頼りにしているよ。」と、ゆつたり言った。

「でも、それは『親友として』だよね。」

僕は、しなちやんのあの姿を見て、心が決まった。しなちやんに、絶対に伝えなければならない。

「僕たちは、ずっと友達として仲良くやつてきた。けど、それには限界があると思うんだ。」

しなちやんが、眉をひそめた。彼女の表情が、みるみる悲しみ一色になつていぐ。

「……なに……それ……もう私とは仲良くできな……ってこと? 私の家の事情を知つたから、こんなやつとはやつていけないってこと?」

静かにやつ言つた声が、冷たかった。しなちやんの声ではないほどに。

「優士は、私が可哀想だと思つてるんだね。私のことを、不幸な子だと思つてるんだね。だとしたら、すこく迷惑だよ。私、そんなことちつとも思つて欲しくないし、仲良くできないと思つんだつたら、それはそ……」

僕はいつかの時のように、しなちやんの言葉を止めた。抱きしめてあげられなかつたけど、その代わりに手を握つた。しなちやんの目が見開かれ、手が少し震えた。

「僕は、思依茄の側にいたいんだ。思依茄の心……元通りにならないかもしれないけど、ずっと側にいてあげたい。同情とか、哀れみとか、そんなことで言つてるんじゃない。思依茄のことが、大切に思つてゐる。思依茄は、僕の中で特別な存在なんだ。」

僕は、しなちやんの顔を見上げた。しなちやんは、涙を流していた。嗚咽することも無く、両田からぽりぽりと、止めど無く水滴が零れ落ちる。

泣かないで。やつ言つて涙を受け止めあげると、しなちやんは何度も頷いた。

* * * * *

優士が私のことをそんなふうに想つてゐるなんて、一度も考えたことはなかつた。私の目から、次々と涙が落ちていつた。小さい頃は、そんなこと思つたことも無いのに、あの神陸さんのラブレターを優士が読んでいる姿を見たのを引き金に、訳の分からぬ苦しみが私を襲つてきた。私の中が不安でいっぱいになつて、どうしようもない悲しみが込み上げてきた。あれがどういう気持ちなのか、さっぱり分からなかつた。優士が私のことを抱きしめてくれた時、単に私は幸せだつた。心がフワフワした思いで満杯になつた。

「思依茄は、どう思つてゐる？」

優士の少し癖のある、おじせんと同じキレイな金色の髪が、さわさわと風にそよいだ。優士、いつのまにこんなにカッコよくて、背の高い男の子になつたんだろう？私は、彼のことをどう思つているんだろう。

「お邪魔いたしまあーす。」

私達が声のした方を見ると、とても中学生の母親とは思えない旭さんがそこに立つてゐた。いつからいたんだろう？

「とてもロマンチックなお取り込み中大変申し訳ないのですが、少し思依茄ちゃんとお話しがしたいですう。」

旭さんは、完璧に今の話を盗み聞きしてゐたに違ひない。私は、今ごろになつて真つ赤になつた。優士も耳まで赤くなつて、口を尖らせながら少し離れた窓辺に向かつた。旭さんを見ると、怖いほど満面の笑みを浮かべていた。

「あ、あの……」

旭さんが片目を瞑る。彼女はウイークが上手い。

「まあ親公認という訳で、いいんじゃねえか。」

シシシと彼女は意地悪く笑つた。しかし、すぐにまじめな顔になつた。

「それは置いといて。思依茄ちゃん、君のお母さんはわざを逮捕されたよ。」

私は、もう予想がついていたことなので、特に驚きもせず頷いた。旭さんは、私が取り乱すと思っていたのか、少し安心したような顔になつた。

「思依茄ちゃんは施設に行くことになるけど、大丈夫か？」私は頷いた。

「会いに行くから、元気にしてるんだぞ。」

そう言って旭さんは笑つた。

もう何も望まない事にした。これ以上望めば、きっと罰があたるだろう。私のことを心から心配してくれる人が、二人もいる。私の心の傷口が、少し閉じた。安心感が、心を覆う。

「では、私は退散しますか。お一人さん、ごゆっくり

そう言いながら、旭さんは白いドアの向こうに引っ込んでいった。私達はお互いの赤い顔を見合つたが、すぐに吹き出してしまつた。優士との出会いは最高の喜びだと、私は心から思った。この先に続く私の道が、宝石の粉でも散りばめた様にキラキラと光つて、私を魅了していた。

1 0 7 7 1 0 7 7 1 0 7 7

僕は、ぶつぶつと咳きながら、数字がびっしりと並んだ紙から、少し離れた所に立っていた。そして、一・七の視力をフル活用して、1 0 7 7を探していた。この学校に入学する為に、僕はずつと頑張ったのだ。無ければ困る。まるで誰かが用意してくれたような、澄み切った空がどこまでも広がっていた。緊張で心臓が潰れそうになる。

「あ！」

この場所についてから約十分後、僕は、何列か並ぶ数字の列の右から三番目・上から十五番目に1 0 7 7を見つけた。嬉しさが、じわじわとこみ上げてきた。

「優士ーー！」

後ろからガバアッと何かが飛びついてきた。僕は少しよろめいたが、何とか踏ん張った。

「…ビックリした。人がせっかく喜びをかみ締めてたところなのに。

僕は後ろのその人を振り返って、ニヤッと笑った。その人は僕を放してしばらく呆然としていたが、やがて笑顔になり、やつたね！と言って手を叩いた。

「良かつた！本当に良かつた！」

その嬉しそうな表情に、僕の喜びは何倍にもなった。

「私、古座巳 優士の入学試験の結果は、合格であります。そちらはいかがでしたか？」

僕は彼女の顔を見た。彼女は旭のようにウインクをして、僕の真似をした。

「私、草田 思依茄も、先ほど合格という結果を見てまいりました。

しなちゃんの笑みが、更に輝きを増した。僕たちは互いにおめでと

うと言つて、笑い合つた。

「そ、行こう！」

僕が書類を受け取るや否や、しなちやんはそう言つた。そして僕の手を握り、走り出した。

僕は、今とても幸せだ。何もかもが上手く収まつたわけじゃないけど、これからきっと、数え切れなくくらい楽しいことがあるんだ。

僕としなちやんは、それを信じている。

春が始まりだした。

ハピローグ（後書き）

大分前に書いたものなのでかなり色々無茶してますね（苦笑）
お見苦しい点が多々あつたと思いますが、最後までお読みいただき
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5065d/>

できれば、もう一度

2010年12月29日02時40分発行